

音楽科授業案

教科で育みたい人間像 「音楽や人のよさを見いだす、心豊かな人」

授業者 兵庫 廣多

- 1 日時 令和6年11月1日(金) 第1時 10:20~11:10
 2 学級 3年A組 (音楽室)
 3 題材名 『アメイジング・グレイス』の表現を追求する

4 本題材で願う学び

『アメイジング・グレイス』の曲の背景や、多彩な表現方法から感じとったことをもとに、曲の表現方法や歌い方について考えながら実際に歌唱表現を行うことで、歌で表現することの価値や喜びについて自分なりの考えをもち、音楽をより深く味わえるようになること。

(学習指導要領との関連：A表現 (1) 歌唱ア イ(ア)(イ) [共通事項] 音色、旋律)

5 これまでの学び

子どもたちは2年時に「民族音楽をもとにしたリズムアンサンブル —インドネシア『ケチャ』—」という題材を通して、リズムによる創作活動を経験した。

授業者は、子どもたちにとって身近ではない民族音楽という新たなジャンルとの出会いを通して、世界の民族音楽について知り、音楽の多様性に気づききっかけとなることを願って授業を構想した。

世界の民族音楽の中には「ケチャ」(インドネシア)の他にも「カッワーリー」(パキスタンなど)や「オルティンドー」(モンゴル)など、リズムに特徴がある音楽が数多く存在している。多様な世界の民族音楽を鑑賞した後に「ケチャ」に出会うことにより「リズムが重なるようにして成り立っている」というケチャならではのおもしろさに気づき、自分たちで音の重なり方を工夫しながらオリジナルケチャをつくりあげていった。(図1)



図1 オリジナルケチャを演奏するようす

このように、民族音楽をつくるという特別なアンサンブルの経験を通して、音を重ねることで仲間と音を合わせる楽しさや難しさを体感し、リズムが曲に与える雰囲気や印象について考えを深め

ることができた。このように、体感しながら演奏することで、多様な音楽に親しみ、音楽への理解を深めることにつながると感じた。

3年生になり、滝廉太郎の『花』について、歌唱表現の追求に取り組んだ。『花』は西洋音楽ベースの作風の中に日本の四季の情景が表現された名曲である。子どもたちは自らの視点を持ちながら、自分が表現したい曲の部分(歌詞、旋律等)に注目し、意欲的に活動を行った。子どもたちは次のように活動をふり返った。

- 『花』から感じる春感について追求していった。歌詞やリズムを分析していくことで、なぜこの曲から春感を感じたのか、ということが理解できた。音楽の追求は曲を分析することで深められると思った。
- 音楽は作曲者や作詞者の目に見えない気持ちが、音や楽譜を通して形になって表されるものだった。それらを全て汲みとるというよりは、目に見える形にするときには大本の部分の想いを考えることが大切になってくると考えた。
- 歌詞とメロディーがリンクすることによって、聴く人に歌詞の共感性をもたせ、曲をつくった人の想いと歌手の想いのどちらも合わさっていくことで、よいものをつくることのできるのかなと考えた。

音楽について分析的にとらえて聴き、音楽の表現に生かそうとすることは、よりよい表現をめざすうえでとても大切なことであると感じた。

一方で、歌うことの意味や表現方法の多様さについて感じとったり、視点を当てたりした記述は多くなかったと感じた。理由は、教科書に載っている曲は「音楽の授業らしい歌い方」で歌わなければならないという先入観があり、歌そのものの存在価値や

表現することの奥深さを感じるまでには至らなかったからだろう。また、ポップスの歌い方をそのまま歌唱に反映させてしまい、無意識に装飾音を付けて表現したつもりになってしまいう子どももいた。これまでの学びの中で、意図をもって歌い方を変えたり、歌うことについてじっくりと向き合ったりする経験が少なかったことが歌そのものの価値に迫ることができなかった要因だろう。

そこで、音楽のエネルギーをダイレクトに感じられる歌唱の題材に取り組むことで、音楽の多様なあり方について考え、音楽をより深く味わうことができるのではないかと感じた。

6 題材観

(1) 本題材の価値

①歌うことの本質とは

世界にはさまざまな音楽ジャンル（讃美歌、ゴスペル、R&B、クラシック等）があり、歌は現代においても人々に大切にされ、発展してきている。このように、世界の人々に愛されている歌の本質とは何なのだろうか。

授業者の考える歌の本質とは、心のエネルギーの解放である。声に出して言葉を発したいという思いは本能的なものであり、人が生きていくうえで「そうせざるを得ない場面」で歌うという行為が行われているのである。例えば、仲間やチームへの熱い声援が合唱となったり、信念を広く人々に伝えようとしてシュプレヒコールが起こったりする。また、災害などの困難が生じ、取るべき行動が全て尽きたあと、心細く不安な心を支えるために仲間同士で歌を歌うこともあるだろう。このように、歌は人の心と近い部分でつながっており、誰もが心の内に感じるものを音楽という形で体現しやすいものではないだろうか。本題材を通して、歌は人の心を動かす力を持っていることを体感的に理解することができたら素晴らしいことだと思う。

また、歌は国や民族、時代によって違いはあれど、共通してもち合わせている概念だろう。例えば、労働歌を歌うことで仕事への士気を高めたり、辛い労働の日々をなんとか乗り越えようとしたりすることがある。このような歌は世界中で残されている。過去に生きた人々の言葉や掛け声を通して過酷な環境を想像したり、体感できたりすることは歌を歌う大きな価値である。現代の日本においては人権を無視するほどの過酷な労働を強いられることはほとんどないが、疑似的にその時代に生きた人の歌を歌うことによって、時代や人種を越えて人々の思いを感じとりながら歌うことができるのではないだろ

うか。このような音楽体験を通して、歌の存在意義の幅広さを感じとることができるだろう。

また、歌は楽しいときに何げなく歌うものだと考えている人の「鼻歌」と、歌は辛く悲しいときに困難に打ち克つために歌うものであるという常識の中で育った人の「鼻歌」とでは大きな価値観のギャップが生まれ、このような人々が生活をともにしたときには互いにカルチャーショックを受けざるを得ないだろう。

このように歌一つとっても多様な文化の中で存在しているものなのである。

②『アメイジング・グレイス』を歌唱の題材とすることの価値

本題材で扱う『アメイジング・グレイス (Amazing Grace)』は CM やドラマ、アニメーションの挿入歌としても有名であり、多くの人々が耳にしたことのある名曲といえる。そのため、日本を含めた世界中のアーティストによってカバーされ愛されている。

ア 曲の生まれた背景が明確な曲であること

『アメイジング・グレイス』は1772年にジョン・ニュートンというイギリスの牧師によって作詞された、大変有名なキリスト教の讃美歌である。

「amazing」が「驚嘆するほどの・驚くべき」、「grace」が「恩恵・恩寵・神の恵み」といった意味合いで、「信じられないほどに降り注がれる神からの愛」を表現している。過去に黒人奴隷を運ぶ船を運航していたジョン・ニュートンが、かつての過ちを悔い、神への感謝を説いたことがもととなりつくられたといわれている。この曲は、今でも讃美歌として多くの人に愛されており、主にプロテスタント系キリスト教教会（黒人教会）で歌い継がれてきた。アフリカ系アメリカ人の音楽文化である「ゴスペル」や「黒人霊歌※」とも深いつながりがある曲である。神への信仰が曲のベースになってはいるが「神は自分のような哀れ・惨めなものさえも救ってくださる」という歌詞からは、過去の過ちへの許しだけでなく、生きることの苦悩についての癒やしやが込められた曲であるといえる。

歌詞の内容や曲が成立した歴史的な背景がはっきりしている曲であるため、誰にとっても、曲の価値やよさを感じられる曲であると考えている。

イ 歌い方の自由さが許容される曲であること

この曲はペンタトニック・スケール（5音階）を用いて作曲されているため、日本人にとってもどことなく哀愁を感じさせ、メロディーが自然に体に

※「黒人霊歌」という表現は現在では人種差別の撤廃のため「スピリチュアル」もしくは「アフリカンアメリカン スピリチュアル」と呼ばれることが多い。しかし、本題材においては、ルーツとなった音楽・歴史であることを伝えることを優先して、黒人霊歌という表現を用いることとする。

なじむ感覚もあるだろう。

メロディーの起源ははっきりとはしていないが、バグパイプで演奏されることも多く、スコットランドの起源であるという説やアメリカのプランテーションソングが起源とされる説がある。現代では「ゴスペル」の名曲として知られ、ソウルフルで自由な表現に耐えうる楽曲であることも本題材の魅力の一つである。歌い方の形態としても、コールアンドレスポンスを用いてチャーチ風の合唱（ゴスペルの様式）としても成立することはもちろんのこと、1人でも、ポップス風のボーカルアンサンブルも成立するという懐の深さをもっている。このように、幅広い歌い方で親しまれている曲であるため、どのような歌い方であっても、歌う人の思いが表現しやすい、魅力ある曲だといえる。

この題材を通して、普段好んで聴いているポピュラー音楽の中にも「ゴスペル」の要素のある楽曲があることに気づくこともあるだろう。また、街で耳にする音楽にも思いや意図が込められているのではないかと考え、音楽の耳をもって生活することによって、今までとは違う感覚で音楽と向き合うことができるようになるのではないかと考えている。

(2) 本題材で願う子どもの姿

本題材を通して「自由に自分を表現する手段としての音楽」という視点を持ち音楽に親しんでいく子どもの姿を期待している。

一つめは、表現したいという思いをもち、試行錯誤する姿である。表現を追求していく場面では「どのような声で歌うと自分の考える表現ができるだろう」「〇〇な声を出したいけれど、どうすれば狙った声が出せるだろうか」というように、自分の表現したいことと今できることとのギャップに直面するだろう。そのような場面では、仲間に意見を求めたり、実際に演奏している音源を聴いたりして、声を出しながら試行錯誤する姿に期待している。自分のめざす表現が完成せずとも、自分が表現したい

という思いをもち、音楽と主体的にかかわろうとすることはかけがえのない経験であり、音楽のよさを感じることにつながるはずである。

二つめは、多様な表現にふれ、仲間のよさや音楽のよさを感じる姿である。演奏を聴き合う場面では、実際に仲間の演奏を聴くことで、同じ曲でも表現したい思いや演奏する人の個性がさまざまに表出されるという生の音楽体験を大切にしたい。当然、仲間の前で歌を歌うということは心理的な抵抗感を伴うものであるが、歌う人も聴く人も、歌で表現したいというその人の思いを大切にすることで、仲間の心情にまで寄り添い、表現のよさを感じとることができるだろう。そして、仲間の歌を聴くことで「自分もさらに表現を磨いてみよう」と、さらに試行錯誤し、歌い方に迷いながらも「次はもっと思う存分表現してみたい」といった思いをもち、音楽のよさを感じていく姿に期待したい。

子どもたちにとっては、歌で自由に自分を表現することは、精神的にも発達段階的にも易しいものではないだろう。しかし本題材では、表現することへのハードルが高いと感じている子どもたちにとっても、歌で表現することの心地よさや価値を感じることができるはずである。

このような音楽体験を通して、音楽表現の幅広さを味わった子どもたちは、声によって表現される音楽の価値を見だし、音楽を演奏する人のすごさや音楽自体がもつエネルギーに気づいていくだろう。演奏することのみを題材のゴールとするのではなく、歌について向き合うことで歌うことの価値について新たな思いをもったり、音楽を聴くときの感性が磨かれたりしていくような、多様な音楽とのかかわりができることを期待している。そして、音楽での学びを通して、自他を尊重する豊かな人になっていくことを願っている。

7 題材構想（全8時間）

- | |
|---|
| (1) 『アメイジング・グレイス』を歌ってみよう（1時間）
(2) 鑑賞を通して歌い方の違いを感じとろう（1時間）
(3) 曲についての理解を深めよう（1時間）
(4) 『アメイジング・グレイス』の表現を追求しよう（3時間）
(5) 追求してきた表現の仕方について共有しよう（1時間：本時）
(6) お互いの演奏を聴いてみよう（1時間） |
|---|

本題材で大切にしたいのは、歌うことの本質に迫ることのできる音楽体験をすることである。そのため、個人で歌についてじっくりと向き合うことのできる時間を確保することを意識し題材を構想した。

表現活動のみを題材のゴールとするのではなく、表現することの意味とじっくり向き合い、仲間の考えから歌についての新たな気づきを得るように、意見を交わす場を意図的に設定していきたい。そのよ

うな場面をつくることで、歌い方の特徴だけでなく、表現すること自体の心地よさについても味わうことのできる題材となると考えている。

(1) 『アメイジング・グレイス』を歌ってみよう

(1時間)

本題材への導入として、授業者は「英語の歌を歌ってみよう」となげかける。子どもたちは以前に日本の歌について追求活動を行っているため「次は英語の歌の追求かな」「音楽の授業で英語の歌をやるのは新鮮だな」という印象をもつだろう。

まずは日本語の歌と英語の歌の違いを感じながら、歌ってみることを通して「自分にも英語の曲が歌えた」「自分の知っているレット イット ビーよりも短いな」「そんなに難しくなさそうだ」という思いをもち、題材に対して前向きに取り組もうとする気持ちを育みたい。

(2) 鑑賞を通して歌い方の違いを感じとろう

(1時間)

『アメイジング・グレイス』を歌うことについて少し慣れてきた場面で、授業者は子どもたちに対して「歌う追求活動を行ううえで大切なことは何か」と問いかける。子どもたちからは「歌詞の意味を考えて歌うこと」「歌詞の意味と歌い方が合っているかを考えながら追求すること」「曲を聴きながら歌について考えること」といった意見が挙がるだろう。

そこで授業者は「まずは実際に歌っている様子を聴いてみよう」と提案し、曲の幅広い表現方法を用いて演奏された映像を流し、曲についての理解を促す。鑑賞する曲は以下の3曲である。

- ①日本でも有名なカバーである、ニュージーランド出身の歌手ヘイリー・ウェステンラが歌ったもの。
- ②ゴスペルの歌唱法を生かした、ハーレムゴスペルクワイアが歌ったもの。
- ③2015年、サウスカロライナで行われた追悼演説でオバマ大統領が歌ったもの。

現代においても、多くの人に愛されている名曲であるため、曲の鑑賞を通して、さまざまな歌い方で歌われている曲だということを知った子どもたちは以下のような思いをもつだろう。

- ・今までに聴いたことのある歌い方をしている曲があった。ヘイリーの曲が原曲だと思っていたけれど、カバーされた音楽だと知って驚いた。
- ・ゴスペルグループの歌い方がとても特徴的だと思った。お腹の底から声を出している感じがして力強さを感じた。

- ・ゴスペルグループの歌い方は1人で歌う部分とみんなで合わせて歌う部分があり、おもしろいと感じた。両方の歌い方のどちらも何かを表現しようとしているのが感じられた。
- ・オバマ大統領が歌っているのを聴いてみて、演説で歌うなんてすごいと思った。周りの人が手をたたいたり一緒に口ずさんだりしているようすを見て、誰もがこの曲を知っていてみんなでも何かをたたえる感じがした。

など

子どもたちは鑑賞を通して、この曲には多様な表現方法があることを感じるとともに、曲に込められたメッセージや曲のもっている背景の部分に興味をもつだろう。

(3) 曲についての理解を深めよう (1時間)

本時では『アメイジング・グレイス』の背景を知り曲についての理解を深めるために、曲を聴いたり歌詞の意味を調べたりする時間を十分に確保する。そして授業の最後には調べてわかったことを共有する時間を設けることで、全員が曲について共通した認識のもとで追求活動に向かうことができるだろう。以下は共有した際に出てくる意見の一例である。

- ・曲の成立の背景が、黒人の奴隷貿易に関係すること。
- ・教会で長らく歌われてきた曲であること。
- ・シンプルな音でできている曲であること。
- ・曲には後悔の気持ちが込められている、祈りの歌であること。
- ・アメリカでは第二の国歌と言われるくらい大切にされている曲であること。

など

子どもたちは初め、鑑賞を通して自分が感じた心の動きの要因について「歌っている人の声がいいから」「歌い方のテイストがさまざまだから」といった表面的な表現に注目するだろう。しかし共有することを通して、曲の背景を知り、理解を深めるにつれて「曲自体に歌い継がれてくるだけの深い思いが込められていたからではないか」「音楽を通して過去に生きた人々の心情を表していたからだと考える」というように、「曲を歌っていた当時の人々の複雑な心情が曲に内在しているからこそ感動があったのだろう」と歌に対してのとらえ方が深まるだろう。

この曲が大切にされてきた背景を知った子どもたちに対して、授業者は「あなただったらどのようにこの曲を表現するか」と問う。子どもたちは「自

分だったらどのように歌うのだろう」「『花』の歌唱とは違う表現方法を考えていこう」「難しそうだけど自分の歌い方を見つけていきたい」といった思いをもつだろう。

(4) 『アメイジング・グレイス』の表現を追求しよう (3時間)

歌う追求活動に入っていく際、子どもたちはさまざまな考えをもち表現していくだろう。

- ・きっとこの曲の表現方法は自由だと思うので、自分なりの歌い方を見つけていくのがいいと思う。
- ・最初『アメイジング・グレイス』はしっとり歌いあげるのが合っていると思ったが、力強く歌うのも合っている曲だと思った。理由は歌詞の内容が「神の恵みはこのような哀れな者も救ってください」と歌っているので、思いの強さが表れる歌詞だと感じたから。
- ・歌が苦手なのでどのように表現したらいいかはまだわからないけれど、自分なりの表現を見つけていくのがいいと思う。自分が出しやすい音の高さで、どのように曲を表現することができるのかを試していきたい。
- ・1人で歌うときと、数人で歌うときの表現の違いについて考えてみたい。

など

歌で表現することが苦手な子どもも、自分なりの表現をすることが本題材のめざす表現につながることを授業者はおさえない。そのため、歌い方を教えるのではなく「あなたが表現したいのは、曲のどの歌詞なのか」と問い、それぞれの表現したいことに寄り添いながら言葉かけを行いたい。また、歌が得意な子どもの中にも、正しい音程で歌うことが歌の上達だと考える人がいるかもしれない。そのような子どもには「音程を正しく歌うことによって得られる音楽的な表現は何か」と問い返し、楽譜上の音符や音価のみにこだわり、正しく音を出すという意識に縛られないようにサポートしたい。

思いを込めて表現しようとするときに思わず音が変化したり、声を揺らしたりする経験を重ねる中で、表したい心情の表現方法を追求することが本題材の醍醐味であることを確認し、より歌の本質に迫ることのできるような追求活動につなげていきたい。

基本は個人での活動を大切にしながら、複数人での歌い方について追求してみようと思うこともあるだろう。その際には必要に応じて、仲間に協力してもらい複数人で歌うときの表現方法を試していくように伝える。

(5) 追求してきた表現の仕方について共有しよう (1時間：本時)

個々に追求してきた『アメイジング・グレイス』の歌い方について、クラス全体で意見を共有する時間をとるようにする。仲間と意見を交わすことで、自分の考えていたことが同じであることに勇気づけられたり、違う意見から新たな視点が得られたりするだろう。仲間の意見を上手に自分の表現に取り入れていくことが音楽表現の幅広さにつながってくる。

仲間の思いや表現方法にふれた子どもたちは、自分の表現方法について見つめ直し、新たな表現に挑戦したり、自分の表現方法をより確かなものにしたいという思いをもったりするだろう。そこで、授業者は「手直しの時間をとるのはどうか」と声をかけることで、一人一人がより表現へのこだわりをもちながら、追求活動に取り組むだろう。そして、よりよいものをめざす姿が次時の活動への原動力となるだろう。

(6) お互いの演奏を聴いてみよう (1時間)

題材の最後には、歌唱の追求の成果を人に伝える場面を設けることとする。大人数の前で1人が歌うことは心理的なハードルが高いと予想されるため、3人程度の小グループを組み、自分以外の音楽表現にふれる機会としたい。お互いの発表を終えた子どもたちは、緊張しつつも音楽を表現することのよさを味わうだろう。

- ・実際に歌うことはとても緊張した。がちがちになって思っていた表現が出し切れなかった。しかし、人前で歌うということはしたことがなかったので貴重な経験になった。
- ・今まで『アメイジング・グレイス』の歌を追求してきたが、自分のやりたかった表現ができたのではないかと感じた。理由は聴いてくれた人が言葉の力強さが伝わってきたと言ってくれたからだ。
- ・自分は今までなんとなく、歌は正しく歌わないといけないという思いをもっていた。しかし、自由な表現が許される『アメイジング・グレイス』を歌ってみて、どのような思いをもって歌を歌うのかが一番大事だということがわかった。あと、曲の成立した背景を考えて、そこに思いをのせるというのも歌の大切な部分だと感じた。実際に歌ってみて気づくことが多かったと思った。

など

このように歌唱の題材を通して、歌の根底には思いがあり、歌を通して思いを表現することで音楽は生き生きと存在することができるという実感をもつことができるだろう。

本題材を通して、多様な音楽文化にふれること

のみならず、普段は感じる事のない音楽の魅力や歌の魅力について体感した子どもたちが、音楽についてさらに親しみをもって人生を歩んでいくことを期待したい。

参考文献：ウェルズ恵子(2014)『魂をゆさぶる歌に出会うーアメリカ黒人文化のルーツへー』岩波ジュニア新書

小川洋司(2001) 『深い河のかなたへー黒人霊歌とその背景』音楽之友社

木島タロー(2020) 『歌って生き抜け命のコーラス 宗教ファジー日本はゴスペルから何を受け継ぐのか』ギャラクシーブックス

長谷川諒(2023) 『中学校音楽「主体的に学習に取り組む態度」の学習完全ガイド』明治図書出版

参考資料：黒人霊歌の基礎知識 <https://i-sms-gospel.jp/spirituals/>

櫻井雅人(2003) 『一橋論叢第130巻第3号平成15年9月号』

<https://hermes-ir.lib.hit-u.ac.jp/hermes/ir/re/10145/ronso1300300010.pdf>